

夢窓幼稚園通信第53号

2018年 10月 31日

さらこな、トロリ、おだんご作りをする子どもたちの上、青い空には、むくむくした群れた羊のように、雲が浮かんでいます。例えば、園庭の角に立って、対角線の先に目をやると、ひとつの秋の風景が広がります。

別の角に移動してみると、また別の秋の表情です。同じ庭が4つともそれぞれ別の風景のようにも思われます。空の上の方から眺めたら、さらに違ったものになることでしょう。

このひとつ所の多様な景色を、今同時に感じる事ができれば、面白いだろうなと思いました。

「えんちょうどりら、ほらさらこなこんなにできた！」と、見せにきてくれた声に我にかえると、園庭はたくさんの響きと共に広がっているのに気がつきました。

目の前にある見える風景を、そっと消して、聞こえてくる音や声……いのちあるものたちの響き……の中に生きようとする、私という耳に流れ込んでくる響きを通して、空間も、いのちあるものとして広がっていくみたいです。

おまけに、何十年もの間、カリカリと削られた土が、カタカタと板の上で粉になって、ある意味、砂時計として、庭のドラマを刻んできたと思うと、いくつもの秋が層を重ねるように、さらに広がるような気がするのです。

さあ、11月がやってきます。

色づいた葉がたくさん落ちてくる頃になると、おいもを焼く焚き火の煙も漂うことでしょう。イチョウの葉の黄色の花束を手にする姿も見られるでしょう。

大根が吊り下げられたのどかさの中には、子どもたちの歌うクリスマス会の響きが流れてくると、もう12月です。

「私」の中に流れ込んでくる「私」を超えたいのちの風景・重ねられた時の響きが、かけがえのないひとつひとつの魂の表現を通して、晩秋からクリスマスへと、透明な大気の中で生まれてくることでしょう！

園長 升光 泰雄